

読書と読者—フランスの場合

0 . はじめに

本プレゼンではフランスのアナール派文化史家ロジェ・シャルチエの著作である『読書の文化史』を中心に読者と読書の問題を考えていきたい。

1 . 書くこと・書物・読むこと

□書物の歴史学の歴史

20年ほど前のフランスにおける書物の歴史学の特徴をシャルチエは以下のようにまとめている。

書物の歴史学は、その概念や道具を経済史研究から取り入れ、印刷物生産の趨勢をその長期的動向や短期的変動、成長期や後退期において厳密に描き出すことを目標としていた(注1)。フランスにおける書物の歴史学に一貫して見られる第二の特徴、それは社会研究にあたえられた優位という点である。(注2)

数字と系列を主眼におきながら、経済的かつ社会的な側面を注目する。このような特徴を帯びながら、フランスにおける書物の歴史学は発展を遂げた。それは発明と普及、技術と進歩、有名な書物あるいは稀覯のみを扱ってきた伝統的な歴史学が扱ってきた書物の歴史とは一線を画すものであり、革新的なものであった。しかし、いくつかの問題点もあった。

□ 18世紀後半ではフランス語の書物の半分ないしそれ以上がフランス国外で出版された可能性があること(注3)

□ 文化的、知的事実は上手く数えられる事物の中で直接的に把握されうると考えることの危険性

□ 物としての書物の側面を無視してきたこと

この3点のうち□が特に重要だと思われる。テキストが載っている形式は意味に何の効用も及ぼさないと考えることは、テキストをある抽象的な概念とみなし、読書という行為を別の抽象概念とみなす様な古臭い文学史的思考である。

これに対しシャルチェは言う：

テキストは手書きにせよ印刷物にせよ書物の中に、あたかも重要でない容器の中におかれるように置かれているわけではない。読者がテキストと出会うのは、その仕掛けや構成が意味生産作用を誘導したり粹付けしたりする、ある物の中にテキストが書かれている場合以外には、ありえないのである。(注4)

読書というものは別に突然変異のようになにもものかが頭の中にある言語をささやく様な体験ではない。それは、本という物質を媒介にしてこそ成り立つのである。当然のことのようだがこの点に関しては特に注意を要する様に思える。

□活版印刷は革命か？

次に伝統的な読書の歴史が革命とみなしてきた活版印刷についての考察をシャルチェは行う。伝統的に活版印刷の発明は大きく書物のありかたを変えたと言われてきた。今日でもまだこの様な考え方は根強い。その様な論が決まって取り上げるのは印刷物においてのみ見いだせれる(とされる)書物の特性、また、音読から黙読への読書形態の変化(それは印刷技術によって大量に書物が普及することによって起こったとされる)といったものである。このような、「グーテンベルク革命」に対する一般的な評価をシャルチェは覆してゆく。

まず、印刷されたものの特性と考えられているものについてであるが、たとえば、ページの下に符牒を付けたり、次ページの冒頭の語を置いたりする方法に見られる標式システムは写本だけが存在していた数世紀間に、写本の中にそれらを発見することができる。また、読書を手助けするようなさまざまな標識—紙面や段落や行に番号をつけたり、ページ内の文節を、見える様にしたりにすることは印刷技術の発明よりむしろ、紀元前の最初の数世紀におきた巻物から綴じ本への変化の方がより大きな影響をもたらしたのである。

書物(これはグーテンベルクが発明したのではない)の長い歴史の中に置きなおしてみれば、「筆者文化」から「印刷文化」への移行はその革命的な性格を失うことになる。反対に、印刷本がどれほど写本を継承しているのかが際立ってくるのである。(注5)

次に音読から黙読への移行についてである。伝統的には黙読はグーテンベルクの発明によって大量印刷が可能になった産物と言われてきたがシャルチェはこれに真っ向から反対している。シャルチェによれば、黙読が西洋に現れたのは「グーテンベルク革命」のはるか以前、古代末期のキリスト教徒達の読書行為に現れたのであり、次には13世紀のスコラ学者たちの間に、そしてその一世紀あとに世俗社会にも普及したのではないかという。

そして、活版印刷と黙読の問題に関してこう結論づける。

書物の形式の変化や読み方の変移に関係づけられるべき文化的受容を、あまりにも性急に一つの技術革新(印刷物の発明)のみに帰結させる観点にたいしては、印刷物の文化もまた組み込まれている連続性を強調する、長期的視野を持ったアプローチの妥当性と必要性を確認しなければならない。(注6)

本講演会のプレゼンにおいても何度となく、この印刷物の発明と音読から黙読への問題を扱ってきた。その中で紹介されてきた読書論・読者論の中で、きちんとした形でこのような問題、特に音読から黙読への移行を説明を成すものはなかったように思える。その中でこのシャルチェの論考はもっとも説得力を持ったものであるように私には思える。

□読書行為の諸相

これまでの書物の歴史学は読書というものがつねに今日あるものと同じ様なプラチックであり、印刷部に書かれているメッセージの一方的な受信であると暗黙のうちにみなしていた。この様な捉え方に対し、いくつかの対照的差異によって方向付けられたアプローチが存在している。

一つ目の差異は前述の可ならず声に出してなされた読書と、ラテン語を話す人たちがルミナチオと呼んでいた半発声もせず目だけで沈黙のうちになされる読書との対照的差異である。このことから、二つのことがわかる。一つは、知識人階層の知的プラチックに変化がおき印刷術の発明より以前から、黙読がなされていたこと。もう一つは、それとは対照的に大声あるいは小声で読まなければ読むものを理解できないような層がありその二つの隔たりは長期に渡って持続して

いたということである。

二つ目の差異は一人で隠遁的に内密になされる読書と、公開の場でなされる読書との差異である。

そして三つ目は知識人読書と「民衆的」読書の差異である。民衆（広い意味で）にだけ向けられたものでないにせよ、彼らに向けられた印刷物と彼らの残した読書体験の記録を集め再構築することで書物の達人たちとは違う、ある読み方を特徴づけることが可能なのである。そして、今日ではさらに小規模な差異に注目しこの差異化作業を洗練する必要がある。まず、書物の用法そのものがそもそも読書行為を決定づける様な書物の地位を検討してみることである。(注8)この様な試みは新たな社会的差異の定義となりうる。伝統的に社会史に忠実であった書物の歴史学は集団間の差異を経済的、社会的対立からのみ構成しようとしてきた。しかし、読書というプラチクの歴史学が教えることは別の裂け目を問題とした区分が存在するということである。

男と女、都会人と田舎者、カトリックとプロテスタント、世代間、職業間などである。この様にして書物の歴史学は社会史が固定したカテゴリーを再定式化するのである。

シャルチェは読書行為の諸相についての議論を次のようにしめくくっている：

ある読者共同体に固有な特性と、その共同体が読書によって自ら領有するテキストに見られる文書上および形式上のしかけとが、交差する地点で理解されなければならない。(注9)

□以上、大谷の原文に中沢が必要な校訂を施した。以下、『読書の文化史』を引きつつ補足をした

□ 東アジアとの比較：西洋中心主義的な読書史研究への批判

大規模な印刷物の文化は、ヨーロッパでそれを可能にした技術的発明を動員しなくても存在しうるということを、日本および中国の状況は示してくれる。(中略)これらの国のかつての実状とつきあわせてみれば、15世紀のなかば以来、ヨーロッパ世界においてテクス

トの流通と活字によるそれらの印刷とを結びつけていた絆は、出版活動と読書というプラチックについての、ある特殊な地理的および歴史的条件下にある特定の様態としてしか、もはや見なされないことになるのである。(p70)

2. 読書行為と書物市場

□ フランス革命は啓蒙思想の娘か？

革命直前の世論の形成は、啓蒙思想の作品がもたらした思想やイメージや批判を、次第に増加した読者が内面化することによって達成された、とする仮説は成り立つであろうか。(中略)このモデルが示唆するところによれば、18世紀のフランス人が大革命をおこなったのは、かれらの読んだ本が、かれらのものの考え方や存在のあり方を事前に深く変えてしまったからだ、というのである。(p75)

このような見方、読書は読む行為によって、テキストがかくあれかしと望んだものになるのだ、と暗黙のうちに前提を立ててしまっている。(p76)

→「透明な言語」によって書き手の思想(意図)が読み手にそのまま伝わるはずだ、という前提。実状はどうだったのか？

□ 三つの書籍市場—18世紀フランスにおける—

□ 「奇書・稀覯本」の市場：小規模。愛書家、書籍蒐集家向け。売買される書物の希少性が重要視され、テキストを「読む」ことは大きな意味を持たない。

□ 新刊本(文芸書、哲学書)の市場：国家の保護と特認を得た特権商人による支配(→検閲の存在)。技術上の制約もあり長期にわたって刊行部数が限定されていた。図書館、有料閲覧室などのインフラの整備にともなって増大した読書需要によって次第に大規模に。

□ 民衆的な購買者層向けの市場：最大規模。文芸書、哲学書の既刊を安く仕上げたもの、暦、占い、行儀作法、賛美歌集などを行商人、小間物商人ら移動商人たちが売るといったもの。

□ 「哲学書」の流通—宗教書の衰退にともなう—

公認であれ黙認であれ、許可を受けて出版された書物は、18世紀のフランス人に供給された読み物の一部に過ぎない。事実、フランス王国内には、当時の書籍関係者が「哲学書」と呼んでいたものが大規模に流通していた。スイスやドイツの領邦内のフランス国境付近で、いたる所に設けられた印刷所で印刷され、ひそかに王国内に持ち込まれ、マントの下で売られ、王権によっては禁止され追及されたこれらの作品群は、取引きの書状や秘密のカタログでは「哲学書」と呼ばれて、玉石混淆の商品を含んでいる。これは3つのグループからなっている。(p90 - 91)

- ・ 文字通りの哲学書：政治、権威、道徳や信仰を批判するもの。啓蒙思想家たちの著作も含まれる。ヴォルテールなど。
- ・ ポルノ文学
- ・ 政治の腐敗を告発する諷刺、誹謗文書、ゴシップ話など。

アンシャン・レジームの末期まで、この二つのグループ、すなわち哲学的論説と政治的・ポルノ的作品とは、書籍商の取扱いにおいても弾圧の実施においても、結びついて一体であった(p93)

→ <哲学> □ <低俗文芸> という対比の無効性。そもそもそのようなジャンル意識が存在していなかった。

「哲学書」の取引きや取締りの面でいえば、どちらの系列の作品も、利益につながるような運命にせよ不幸なものにせよ、同じ運命を辿ったのである。(中略)そこに認められる一体性は、書籍商、警察あるいは読者といった外部の目から見ての事実だけではない。書くというプラチックそのもののなかに、この一体性はしっかり根をはっているのである。一方ではもっとも著名な作家たちが、低級文芸のありふれた形式をためらわずに採用している。(p97 - 98) Ex. ヴォルテール

□ テクストの複層性—「読書」の神話—

しかし、このような展望（ロバート・ダントンが言う、政治的誹謗文書が意図せずにフランス革命を準備した、といった評価）においては、読書は、おそらくそれが持つてもない力と効果とを、誤ってあたえられているのではないだろうか。（p 99、括弧内は引用者）

→同時代人ルイ＝セバスチャン・メルシエの言。そうした印刷物の出回る範囲は猥褻な版画などに比べてはるかに狭く、読者の関心も信用も低かった。

ルイ＝セバスチャン・メルシエは、テキストが押しつけようとする表象に「哲学書」の読者が全面的に賛同している、などということ的前提としてはいない。それどころか、メルシエによる読む行為の描き方は、現代の民衆の読書にもあい通じる。すなわち、信ぜずして信じ、大いに賛同しているのに疑わしげな距離を保ち、そう期待されたくはないが納得させられたいという態度をとる、その多義的な性格を特徴づけようとして、イギリスの社会学者リチャード・ホガートが作り上げた現代の民衆の読書に関するカテゴリーを、髣髴とさせないでもないのである。（p 100 - 101）

→ルソーの著作が革命に際し正反対の行動をとることになる読者の間で広く読まれ（貴族も民衆も読んでいた）、『百科全書』が革命によって打倒される伝統的エリートの中に広く受け入れられていたという事実。

これらの事例は、書物にあまりにも直接的な力があると想定する考えをいましめるものである。（中略）君主からの人心離反は、必ずしも知的営為の結果とはかぎらず、みしろ、さまざまな日常的プラチック、無意識におこなわれる身振り、決まり文句となった言葉などの直接的なものを通じて、始動させられたものでもありうるのである。（p 104）

→「王様風○○○」という言葉使いが氾濫することによって王政の超越的な意味が剥がれ落ちる。王政に対する敵意によって起こったのではなく、意図せず自然発生的に広まった。

「哲学書」の成功は、それ以前に人民と王との情愛の断絶がすでに完成し、それらの書物を受け容れ、待ち受ける状態ができていたからこそ可能だったのだ、と考えてはいけないだろうか。それらの書物は、こうした裂け目の創り手どころか、まったく逆に裂け目によって生み出されたもの、というべきだろう。（p 107）

● 付け足し：

・・・読者たちには、かれらを束縛しようとする幾つもの拘束にたいし、それらを侵犯する能力がつねにあるのだ。もちろんこのように確認したからといって、テキストによって展開される意味の統制の戦略を否定しようというわけではないし、読者が所属する「解釈共同体」に固有の規則や慣例によって読者に押しつけられる限界を、否定しようというのでもない。たんに、つぎの点を示そうというのにすぎない。すなわち、さまざまなプラチックや表象の把握は、解釈規範や解釈のしきたり（それらは言説上の規範であることもあれば、社会的なものであることもある）を標定することから、直接引き出されうるわけではまったくない、という点である。（p 21 - 22）

□ 「読書行為の諸相」以下、大谷が Index として挙げていたもの：

□ 書物とヨーロッパ文明の変遷

□ 東アジアとの比較

2 「読書行為と書物市場」

□ 啓蒙思想とフランス革命

□ 書籍市場

□ 哲学書の流通

□ ヴォルテール・ルソー・ディドロ

□ テキストの複層性

□ 読書プラチックの持続と受容

3 「読書プラチック」

□ テキストの世界

□ 作者、テキスト、書物

□ 表象

□ 領有

□ 文化的プラチックと権力形式

4 「読書のポリティーク」ブルデュー×シャルチエ

注 1 ロジェ・シャルチエ『読書の文化史』（福井憲彦訳、新曜社、1992）p 29

注2 同1、p30

注3 同1、p33 シャルチエは注で Robert Darnton, *Edition et sedition*, Gallimard, 1991 を挙げている。

注4 同1、p37

注5 同1、p44

注6 同上 p 4 4

注7 「プラチック (pratique)」という用語には、一般的に「実践」という訳語が当てられているが、「実践」という訳語から想起されるような目的意識的行為(こちらはむしろ "praxis"のほうが適当)のみを指すのではなく、しぐさ、慣習行動をも意味する。「日々おこなわれている行為の総体」といった定義が適当か。

注8 具体例としては、カルヴァン派の聖書、ある種の農村社会における呪術の書、あるいは暦書、18世紀末の知識人にとってのルソーの作品など。

注9 同1、 p 6 2

補足

「どんなものであれ、ある文化的行為について検討しようとするときには、この行為を実践している者として、当の自分自身に問い掛けてみるのが非常に重要だと思われ、また、わたしたちはみな読者であり、その資格において、読書について多くの前提や、規範と結びついた前提を持ち込んでしまいかねないということを自覚しておく必要があります。」 ブルデュー

「読書—ひとつの文化的実践」より

□ いくつかの疑問に答えて

* 音読から黙読へ

・その移行

9~11世紀 修道僧が旧来の習慣を失う時期

13世紀 大学に普及

14 世紀中葉 やや遅れて世俗に浸透

徐々にではあるが、書物との新しい関係、それまでよりもずっとくつろいだ、そして機敏な関係が成立したのである。

注意！！) 19 世紀になってまだ音読は存在していたこと。→ゾラ 「大地」を参照

- ・音読の特徴

読書技術の未発達→繰り返し読むこと

聞く読書の存在

視覚—聴覚

- ・他の読書形態

少数の書物に集中する読書～より多くの書物を読む読書への変遷

e x) 新教徒の聖書を見よ

伝統的(少数の書物を読む)読書—読書行為に尊敬・畏敬の念(権力?)

↓

考え方を文章が規定する

一対一の親密な関係で静かに読む読書の発生(1750—1850) E n g r a n d

注意！！)

読書のあり方の二つの形態を一方から他方へと移行するものとして理解することももちろん大切だが、それら二つの形態の対立を与えられた社会内部における文化的差異の指標として再解釈することも必要である。→前田愛を見よ

- ・結論(移行した理由等)

音読にも種類の読み方が存在→筆記体は読めない等

黙読は知識人階層のもの→読書の能力

↓

外的要因により技術の向上(無論、印刷技術の発展も要因の一つではある)

特に教会の権力の失墜

写本の変化における拘束という要因

テキストと注釈、注解、索引との分析的な関係が目に見えて増えたのである。

□ シャルチェの議論をなぜ?

- ・中沢さんによる「付けたし」

解釈規範を標定することからプラチックはひきだされないこと

・ フランス革命と啓蒙思想の例→直線的な読者論の問題→「かくあれかし」と望まれた読みまたは想定された読みの是非

・ 読書を考えること→無数の社会的要因から切り離せぬという事実



・ 翻って、自分達の学問なりなんなりに対する姿勢を考える

・ 「思想・言説」などをなにか特別な社会から切り離されたものと考えてはいまいか？